

ブックガイド・臨床からのまなざし

●評者
小林隆児
杉山登志郎

小倉 清著

『小倉清著作集』

本書の著者である小倉清氏は児童思春期精神科臨床の道一筋を歩んできた医師で、その臨床能力と炯眼によって、わが国のこの領域ではあまりにも有名である。

本書は著者が長年の臨床経験の蓄積を誰にでもわかるような日常語で、かつ深く静かに語った講演や論文を、二冊の著作集にまとめたものである（1「子どもの臨床」、2「思春期の臨床」）。

小倉氏は本誌七号のエッセイで、わが国の子どもの精神科臨床における昨今の発達障害ブームを痛烈に批判し、このままでは子ども精神科臨床に将来はないと嘆いている。その他の場でも、氏は児童精神科医に

よる子どもの臨床が表層的なものに成り下がっていることを論じている⁽²⁾。児童精神科医は、臨床で出会う子どもたちのこころや生き様を彼らの歴史の中で捉え理解し、治療や援助をするという本来の任務を放棄し、かつそのことにほとんど疑問をもっていないかのようにみえる事態に対して、著者はもはや憤りを通り越し、深い悲しみを込めて述べている。

本号のテーマ「発達障害のいま」を取り上げる一つの契機となったのが、氏のエッセイであった。そこで、評者が本書を取り上げるなか、氏の発達障害に対する思いがどのようなものかを考えてみることにした。

本書のすべての論考に脈々と流れている筆者のゆるぎない信念は、患者が見せるあらゆる言動にはすべて歴史的背景が存在するのであって、それを理解することなしに、彼らのこころを理解することは不可能であること、よって彼らのこころの治療は、彼らと真摯に対峙し、彼らのこれまでの生き様を丁寧に胸い取りながら共有していく作業だということである。

歴史的存在としての人間のこころを理解していく上で、とりわけ著者が重視しているのは、乳児期の体験である。本来、乳児は無力な存在で全面的に他者に依存せずして生きていけないが、そうであるがゆえに、常に周囲他者から圧倒されるような強い力によって翻弄され流されて生きていくしかない。そのこと自体、人生の中でも最大の危機であるのだが、とりわけ精神科臨床の場では出会う人々にあつては、そこでの体験がその後の人生を決定づけるほどの重

い意味をもっているという。

そのような大変な人生体験を重ねてきた彼らに対して治療的関与をもつということは、治療者にとつても大変な覚悟を迫られる。そうした覚悟の上で、著者は臨床面接に際して、彼らに対して身構えることなく、一人の人間同士として真摯に向き合い、彼らの話に耳を傾ける。その中で彼らがこれまでどのような人生を歩んできたのか、その体験が彼らにとつてどれほど大変なことであったのか、毎回五〇分の面接を数年、ケースによっては十数年と積み重ねる中で、彼らのこれまでの生き様を共同作業で描き出す。

このような作業を通して、彼らを圧倒し続けてきた乳幼児期早期の体



岩崎学術出版社、2006年
各4725円

験とその後の壮絶な生き様が文字通り過去の体験として対象化され、それが治療的に重要な意味をもつという。そんな根気強い作業の中で初めて明らかになった彼らの生き様とそこでの思いが、本書全体を通して語られている。それは読む者を圧倒するほどの力をもって迫ってくる。

著者が日頃から学会などで「統合失調症は発達障害だ」と常々主張していることは、よく知られている。では、著者のいう発達障害とは何であらうか。

発達障害とは何かを考える上で、ぜひとも明確にしなければならぬのは、なぜ発達障害なのか、ということである。発達障害とは、土台が育つてその上に上部が組み立てられるという一般の発達の動きが阻害されているということである。乳幼児期早期に子どもと養育者のあいだでなんらかのボタンの掛け違いが起これり、そこに関わり合うことの難しさが生まれ、それをもとに対人交流が蓄積され、その結果、子どもにも多様な障害がもたらされていく。つまりは、日々の関わり合いの中でどのよ

うな大変な思いを体験してきたか、そうした発達の過程を大切にすることなくして、発達障害の理解や治療は不可能なのである。

乳幼児期早期の対人関係の質（養育者らとの身近な大人たちとの関わり合い）は彼らの対人関係のありようのプロトタイプとしてその基盤を型どり、彼らの人格形成に色濃くその影を落としていくのであろう。このことこそ、統合失調症は発達障害であるという著者の主張の含意ではないかとも思う。

評者は、著者の日頃の臨床場面の光景を想像しながら本書を読んだが、その中でとりわけ印象深かったのは、患者のこころ（と身体）の動きを感じ取る繊細さと迫真的な描写である。その一部を抜粋してみよう。

「二歳半にしては小柄でむしろやせているのだが、顔立ちや表情はキリツとして整っており、実に用心深い点が直ちに注目された。警戒しながら二mくらいの距離をとり、暗やみの中にでもいるかのように両手を横に広げ、中腰のままそーっと横に

歩く。眼はこちらにピタッと合わせたまま、半分笑ったような、しかしあまり動かない表情のまま、時どき立ち止まってじーっとこちらを見つめる。ややあつてまたそろりそろりと足を横にのぼして円弧を画くように歩く。一歳半とは思えないほどに全体的な動きはよく統合されている。まわりの物にそーっと指をのぼしてふれて、ゆっくり触って確かめ、そしてまたすり足ですべるように移動する。硬い表情のままだが、それはいかにも淋しげにみえる。確かに安全なもの求めて求めきれないような、半分あきらめたような、しかし瞬間的にはどうでもいいやというような深い溜息を肩でする。少し首をうなだれ、視線を落して泣きそうな表情になる。衝動的、破壊的な点は初診ではみられなかった。むしろいつ迫るかかわからない危険から身を守るのに精いっぱいの人のようにみえた。……」（第一巻「統合失調症の成り立ちについての一考察」より）

子どものこころの動きが読者にも生々しく浮かび上がるほどの、実に細やかな描写であるが、著者の鋭い臨床的観察眼は常に彼らのこころの動きに焦点を当てていることをうかがわせる。まったくことばを発することのない子どもであっても、彼らも身体の動きを通してみずからのこころを雄弁に語っている。評者が日頃の臨床で観察している乳幼児期早期の深刻な対人関係の困難さを抱えている子どもたちが、母子分離・再会場面で見せる繊細な心身の動きと重なってくる。堪えがたいほどの心細さを感じながらも、容易には養育者にしがみつけないで逡巡している子どもたちの姿である。

このような乳幼児期にみせる子どもこのころのありようを、児童精神科医がきちんと捉えずして、誰が彼らのこころの叫びを理解することができるのか。この時期に適切な治療的関与が生まれたならば、驚くほどの早い変化が期待できる。それゆえ子どもこのころの臨床に従事する者への期待と責任は大きい。しかし、そうした期待も今や児童精神科医にかけられなくなるのではないかと、著者は厳しく問いかける。

客観的な行動記述に徹した国際診断基準が、わが国の精神科医療の中



講談社、2002～2004年
各1575～1785円

で大手を振って闊歩している。その結果、発達障害は中枢神経系の成熟過程の障害を基盤にもつものとの大前提の中で、子どものころに代わって脳障害に光が当たり、訓練や指導の花盛りである。発達障害の理解や治療に「こころ」が消えてしまっている。子どもの「こころの臨床」の重要性が声高に叫ばれる契機となったのが発達障害問題だというの

中沢新一著

『カイエ・ソバージュ』(全五巻)

中沢新一は「チベットのモーツァルト」(せりか書房、一九八三年)を皮切りに、チベット密教の修行と、フランス構造主義の研鑽からトータルかつラディカルな思想を展開してきた。書評子は中沢の一連の仕

は、随分と皮肉な現象である。

(文獻)

(1) 小倉清「愛着・甘えと子どもの精神科臨床」『そだちの科学』七号、二二二―二二五頁、二〇〇六年

(2) 小倉清「世界史履修遺漏問題、子どもの精神科臨床、そして人類のこれから」『学術通信』岩崎学術出版社、八四号、二一五頁、二〇〇七年

小林隆児

事からさまざまな学びを得てきた一人である。『カイエ・ソバージュ』(野生の手帳とでも訳せばよいのか)のシリーズは、中沢のこれまでの仕事の集大成といえるものである。二一世紀初頭に生きるわれわれにとつて重要な内容が含まれており、認知考古学および文化人類学による温故知新の一つの到達点ではないかと考

える。
そこで、やや冗長になることを覚悟の上で(編集者から長くなっても

良いと快諾を頂いたので)、この五巻の書評を試みたいと思う。ただし書評子は、構造主義についてはよくわからないところがある。特にラカンは比較的身近な精神科医(たとえば鈴木國文など)が二〇年来、正面から取り組んでいるのを横目で眺めつつ、何度かチャレンジをしてその都度、ギブアップを続けてきた。その理由については後述するが、非常に的外れとなる可能性について、あらかじめエクスキューズを入れておきたい。

第一巻は「人類最古の哲学」である。そこで取り上げられているのは神話である。神話が世界規模で共通の広がりをもつものであること、それは現人類の共通の祖先から受け継がれたものであること、さらに独自の論理をもち、神話に展開される思考は人間独自の官能的情動を含めた認知や思考の働かせ方の特徴を反映していること、その内容が今日もまったく色褪せることがない深い意味を含蓄していることが語られる。この人間独自の認知・思考のあり方というテーゼは、カイエ・ソバージュ

の通奏低音であり、その内容に関しては徐々に明確に述べられてゆく。神話の具体例として中沢が取り上げるのは、第一に燕石、第二にシンデレラ物語である。この二つは共に南方熊楠が取り上げたテーマでもある。

燕石は竹取物語にも登場し、一方でまったく同じテーマが西欧のケルト文明にも伝承されている。中沢は南方の分析を紹介しつつ、燕が冬と春、死と生の仲立ちをする存在であり、さらに性的な存在であったこと、燕が海から持ってくる信じられた燕石は、その燕の性格ゆえに、病気を外へ出し、子どもを安産させ、閉じこもった「結婚したがらない娘」を外に出す効果があると考えられていたこと、またこの燕石と非常に良く似たよりポピュラーな物として「豆」の存在があり、豆は同じく死と生の狭間のコミュニケーションを司る物として神話に登場し、それは今日の豆まきにまで受け継がれていること、豆はまたクリトリス、睾丸の両者を象徴する性的なものとして捉えられていたことなど、神話独自の論理の具体例が展開される。